

## 小谷部・

### 森川両君のこと

柿原謙一

藤島さんの「山に忘れたパイプ」の巻末には、中学生時代からの詳細な登山譜が載せてある。そこで私も、こうしたまとめをやってみようと思つて、このところ日記帳、山日記、針葉樹、アルバムなどを繰っているのであるが、その折忘れえな小谷部、森川両君関係の資料がでてきて、思わず胸をつかれたのである。

両君の死去については、針葉樹会報復刊第九号（一九六四・一二）に望月君が書いており、「働かずにいられたかった」とあるとおりであるが、私の手許にある資料もそのことに関するものである。私は太平洋戦争から昭和二十一年四月に復員した。そして森川君を探した。房州の寺に聞けば消息が判る筈である。そう思った私が連絡のため発信した手紙に対して、寺から返信されたものが、つぎに掲げる郵便はがきの全文である。

昭和二十一年五月五日 千葉県長生郡本納

町川戸龍管（谷？）寺鈴木康叔より埼玉県

県秩父町七三五番地柿原謙一へ

拝復森川殿への御知らせ不肖拝読仕候。早速御報致すべくの処遽遅任り申訳無之候。実は森川君には昨年十一月甲州の山に居りし友人の招きにより出発致し翌日遂に死亡致し其友人も二時間後共に黄泉の客となりました。

十一月十二日でした。残念の極みです。御暇が阿りましたら御出下さい先は御返詞まで早々。

止んぬる哉であった。私もこの返信をうけて働かした一人である。篋底にしまひこんで友の冥福を祈り、機会あらば公表したいと思いつつも今日に及んでしまった。「友情のない山岳部なんてつぶしてしまえ」とは学生時代に近藤先輩から聞かされた言葉で、今でも私の胸に銘記されているが、小谷部・森川両君逝去の資料を読むにつけても、戦争が終つた甲斐の山麓での二人の心のふれあひがしのばれ、涙が流れる。闘病生活にあった二人にも、戦争は終つた。これからだ。お二人は、まだまたやりたいことが沢山あったらうに。私はそう思う。

なお前掲資料によると、両君の死去は昭和二十一年十一月十二日とある。望月隨筆によれば同年十二月十三日となる。そのいづれであるかは、これからたしかめればよいことで、私はいま秋彼岸にあたって資料を公表し、薄命なりし岳友を悼むのである。

x x x